朝日歌壇 俳壇

〈ウメⅢ〉　日高理恵子

短歌時評　結社の戦略

小島　なお

昨年末に刊行された角川の令和6年版「短歌年鑑」で、特別座談会「結社はどこへ向かうか」が組まれている。メンバーは外塚喬（朔日）、佐伯裕子（未来）、米川千嘉子（かりん）、楠誓英（ヤママユ）、筆者（コスモス）。

みな結社に所属しており、結社との出合いや、内部の体制、高齢化やコロナ禍における課題や対策、懐事情まで、他結社間では普段あまり共有されない内部の情報を打ち明けつつ、話し合った。結社にまつわる座談会はこれまでにも度々企画されてきたが、それだけ外からは見えにくい組織であることの証左だろう。

結社に入るか、入らないか。かつては短歌を続けるのであれば活動拠点として、指導を受ける場として、結社に所属するのが自然な流れであった。けれど、今は同人誌やインターネットなど、活動、発表ともに多様な場が広がったことで、結社は選択肢のひとつになった。無所属で活動する人もいれば、複数の結社や同人誌に所属し、自らのニーズに合わせて活動する人も増えた印象を持っている。

多様化する歌人たちのニーズに合わせて結社も少しずつ戦略的に変革している。作者と主体を同一視する結社的な読みや世代間で差のあるジェンダー観などを、結社の顔である編集人や選者の層から変えていこうとする動きもみられる。

先日、二十代の歌人と話したときに、「同世代が少ない結社のほうが多くの先輩に自分の個性を見つけてもらえそうな気がして」と決め手を教えてくれて、なるほどと思った。結社を選ぶ側もまた戦略的であっていい。

（歌人）

◇朝日俳壇　入選取り消し　2023年12月10日付の俳壇に掲載した「天界に待つ人増えて冬銀河」と、24年1月28日に掲載した「寒の水棒の如くに飲み干せり」は共に類似の先行句がありましたので、入選を取り消します。また、2月11日に掲載した「湯の中のわが手わが足春を待つ」は同一の先行句がありましたので、入選を取り消します。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661　晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があ

大串　章選

枯れ尽くすことは安らぎ大枯野　（高松市）信里由美子
葱もらふぶら下げ帰る蕪村の忌　（福島県会津坂下町）五ノ井研朗
生き死のおまけのような日向ぼこ　（越谷市）新井高四郎
☆冬ざれや我が一灯に友集ふ　（船橋市）斉木　直哉
万巻の棚の沈黙山眠る　（香芝市）土井　岳毅
父母逝きてのちの歳月冬菫　（大村市）小谷　一夫
ガザの子の未来を願ひ毛糸編む　（神戸市）西村　伸子
☆寒灯や漁港の路地の診療所　（加古川市）森木　史子
山国の風は直球凍てはげし　（長野市）縣　展子
ロンドンのバーのグラスに寒の月　（東京都世田谷区）松木　長勝

【評】第1句。「安らぎ」が言い得て妙。広広とした枯野には遣り遂げた安堵感がただよう。第2句。「葱買て枯木の中を帰りけり　蕪村」を踏まえる。与謝蕪村の忌日は陰暦12月25日。第3句。「おまけのような」がおもしろい。至福のひととき。

高山れおな選

芋ご飯喰うて迎へん大寒波　（藤沢市）朝広三猫子
春疾風波が興奮し始むる　（東京都板橋区）竹内宗一郎
☆大寒の塵から生まれ七十三　（長崎県波佐見町）川辺　酸模
猪もユンボもやたら掘り返す　（西海市）前田　一草
幻影のごとく動かず冬の鴫　（東京都足立区）望月　清彦
☆冬ざれや我が一灯に友集ふ　（船橋市）斉木　直哉
☆寒灯や漁港の路地の診療所　（加古川市）森木　史子
大寒や言葉にならぬ景迫る　（柏市）田頭　玲子
近づけば冬の噴水よろこべり　（横浜市）山本　幸子
大猫へ炬燵の裾を一寸上げ　（つくば市）蔵之内利和

【評】朝広さん。芋ご飯が絶妙。竹内さん。散文性がむしろ悠然とした印象を生んだ。川辺さん。〈大寒の埃の如く人死ぬるより生れたり　三鬼〉を掛け合わせたかのよう。虚子〉と〈ハルポマルクス神の糞よ　もちろん誕生日が寒中なのだろう。

小林貴子選

どの国が行けど寒月みなのもの　（東京都世田谷区）渡辺　礼司
大声は出せばでるもの豆を撒く　（宇部市）永田　芳子
寒風や烏引き伸ばされてをり　（藤岡市）飯塚　柚花
久女の忌俳句を語る友のなし　（岐阜市）三好　政子
踏み跡の無き淋しさや能登の雪　（池田市）横松　一成
水仙は葉組のままに切り取りぬ　（奈良市）辻本　昭代
病妹の苦しむ咳に鳥の声　（福岡市）宮田　寛子
肩だしのセーターを着て仏像展　（川崎市）小関　新
不意に聞く氷の声の乾きをり　（越谷市）安居院半樹
ジャケ買の三冊の本春隣　（盛岡市）菊地　十音

【評】一句目、領土争いは地球だけでうんざり。誰のものでもないことが大切。二句目、節分などの機会を捉えて、たまには大声を出してみよう。三句目、妙な角度で風にあおられるカラス。四句目、「俳句を語る友のあり」になりますように。

長谷川櫂選

米国の敵は米国冬深し　（川崎市）多田　敬
探梅の後姿の若々し　（長崎市）下道　信雄
☆冬ざれや我が一灯に友集ふ　（船橋市）斉木　直哉
選ばれしどぜう放てり寒参り　（堺市）吉田　敦子
新聞をめくれば募る寒さかな　（名古屋市）池内　真澄
生き死にの話にぎやかおでん酒　（越谷市）新井高四郎
寒の雨しづかに闇を濡らしけり　（加古川市）森木　史子
冬ざれや風の分け入る葦の原　（東村山市）内海　亨
寒鯉の一塊の徐に　（下野市）久保田　清
☆大寒の塵から生まれ七十三　（長崎県波佐見町）川辺　酸模

【評】一席。深刻な分裂に苦しむアメリカ。この句、朝日川柳も及ばず？　二席。若い人か、それとも、もう若くはない人か。心が若々しいのだ。三席。冬の夜の円居。また嬉しからずや。十句目。塵から生まれた命。それが何とこの齢に。